

神について、我々は語ることが可能なのか？
神学・哲学が挑み続けた根源的問いをめぐる古今東西の思索を紹介

神について いかに語りうるか

2018年
8月24日
刊行予定

プロティノスからウイトゲンシュタインまで

W シュスラー 編 芦名定道 監訳



A5判 上製・490頁・本体**6,500円**+税
ISBN978-4-8184-0989-7 C3010

取り上げる主な思想家

プロティノス	ブーバー
古代教父	J. B. メッツ
トマス・アキナス	H. d. リュバック
クザーヌス	ヤスパース
シュライアマハー	リクール
カント	リオタール
フィヒテ	デリダ
R. オットー	レヴィナス
カール・バルト	ウイトゲンシュタイン
ブルトマン	老子
ボンヘッフアー	莊子
ティリッヒ	ナーガールジュナ

現代日本における信仰を考える際の示唆に富む論考集

監訳者／**芦名定道** 京都大学大学院
文学研究科教授

本論集における思想の広がりや選択は、現代の思想状況(特に西欧的な)において、宗教哲学の可能性を積極的に追求する上で、意義深い試みと言えるのではないだろうか。……しかし、本論集の意義はそれにとどまらない。それは、「神について語る」という問いが、哲学あるいは宗教哲学の問いであるにとどまらず、優れて現代神学の問いであり、さらには現代日本における信仰の可能性にも関わるものだからである。読者は、本論集からそれぞれの関心に応じて豊かな示唆を得ることができるものと思われる。なお、本論集に収録の個々の論考は、……扱われる思想家の特定の問題(否定神学的あるいは神秘思想的など)だけでなく、その思想の全容や諸特徴についても、的確な論述がなされている。その点で、本論集は西欧の宗教思想への導入ともなるであろう。

(「訳者あとがき」より)

